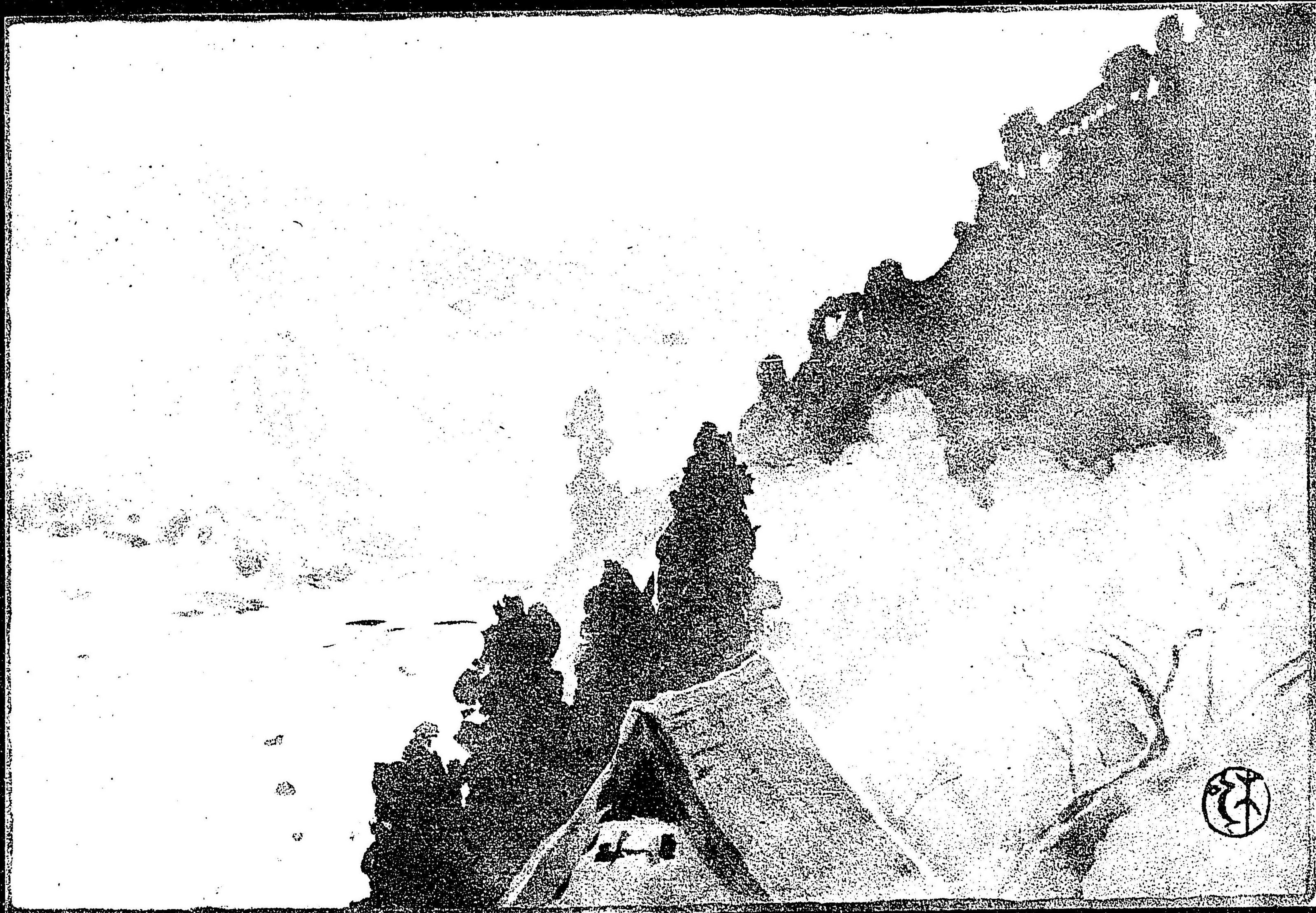


I-3D18

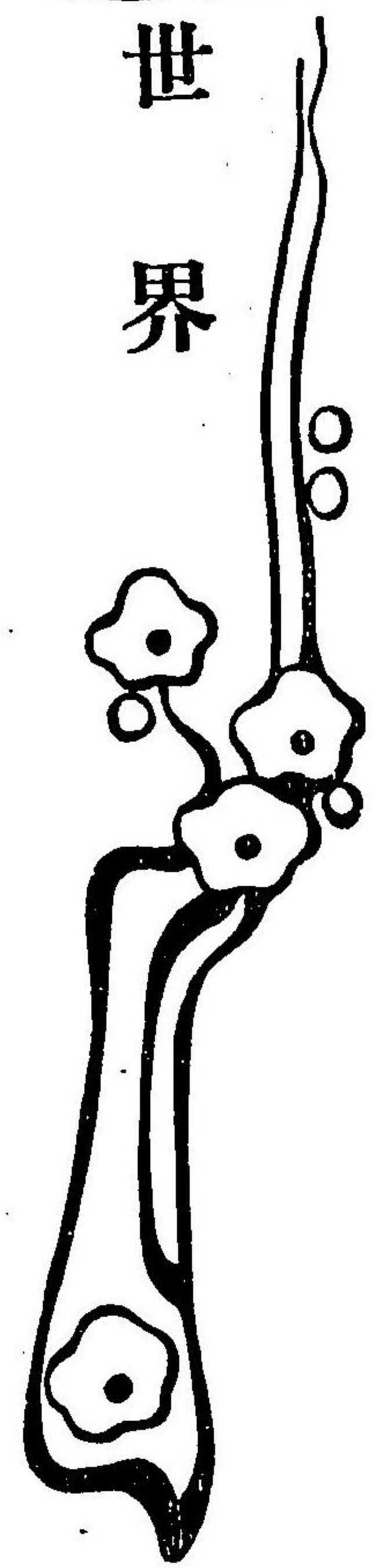


月 瀨 記 六





世界



明治  
38 4 17  
内交

梅は櫻の艶なるにしかずといふは、櫻は梅の雅なるに及ばずといふに均し。物おのゝ特色あり、備はらざるを攻るは、人に翼無きを恨むがごとし。大和國月が瀬の梅、拙堂の文にあらはれ、山陽の詩にうたはれしより、その薫、天が下に満ちわたり、今はその處を見ざるも、その名を知らぬ者なきに至れり。おのれはた、その香なつかしく戀ひわたりしが、こたび、魂あへる友ごち打つれて、年ごろの思ひを果すに至りしは、氷れる水の春風に吹かれし心ちして、のどけさへぞ、夙くうち添ひける。

時は明治三十七年三月の二十日、昨日まで降りつゞきし雨晴れて、軒の鶯も外遊をさそひがほあり。兼て約しつる七條ある奈良鐵道の停車場に赴きつれば、黙語道人先に在り。北莊居士おくれて來れり。けふは、居士も平常のいかめしき服脱ぎすて、黒鼠色の鳥打帽子に、同じき色の外套、和服輕らかに、得意の寫眞機械を肩より打かけたり。道人も同じく和服に茶色の中折帽子、薄鼠色の外套打はおりて、命より貴しといふなる黒革の大カバンを抱けり。おのれも負けじ劣らじの装ひ、鉛筆一本、手帳一冊、鶯色の外套のかくしにおしこみ、各庭下駄からゝ、こ打語らひ、十一時三分といふ發車にて、奈良線に乗込みぬ。

まここや、きのふけふ、我が征露軍隊發遣の最中にて、この驛にては、その征士を犒はむために、プラットホームに、白黒の幕打まはしたり。見れば義に富める愛國婦人會の人たち、おのゝ禮装して送迎の事ども、懇に執行へる、いと勇ましきうれし。かく一國の命を載せゆく車もあるを、我々は、心のどかに梅見の旅を思ひ立つなご、且は憚なきにあらねご、人おのゝ盡す處あり、征士の芳名を梅の薫にうたひ合せ、そが咲けるあたりうつし得て、天が下に我が國美を擅にせしめむはた、國に報ゆる端ごもあらざらむや。されば、この旅も強に制すべきにはあらじ。

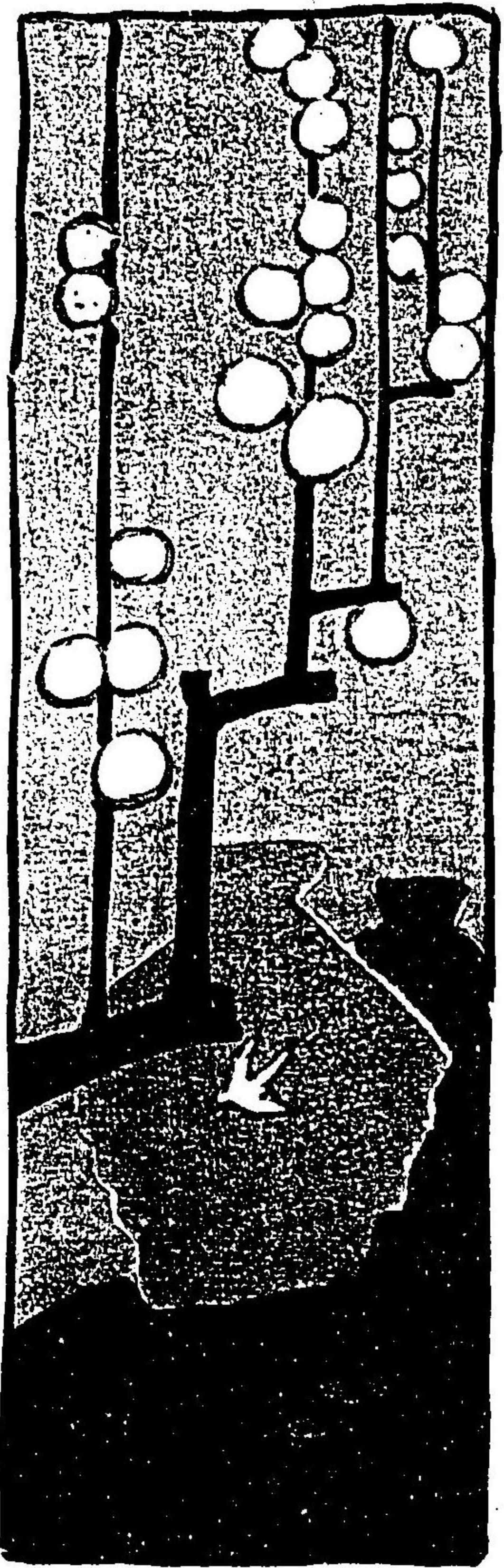
車は進みて伏見を過ぎ、桃山を越えて、宇治橋にかゝりぬ。河瀬の波に、昔の

勇士の面影を偲び、鳳凰堂に、そのかみの建築の美を打語らふほどに、歩みは停まりぬ。やがてボーイ入り来て、茶きこしめせ、さて、朝日焼の碗に、そのぬるみたるを汲みてさし出しぬ。處がらさて打味はゝる。

長池といふ驛にて降る人多し。こはこゝより十八丁の道をゆけば、青谷にて梅の名處なれば、そを探らむ人々ありこそ。同じき思ひの友もあるよ。打眺めらるゝに、はやくも、車はゆるぎいでぬ。このあたりは、梅のみならず、桃梨なども、あまた見ゆ。今日二十日も過ぎなば、この眺めも棄ておくべきにはあらずなご語り合ふ。稻叢の處々におかれたる、丘の梅のひこり咲きたるに、小鳥の囀り遊べるあご、都にては見馴れざる、いこのごかに氣も伸るやうあり。

長閑ありや 丘の下畑 梅ちりて

稻むらがくれ 頬白の鳴く



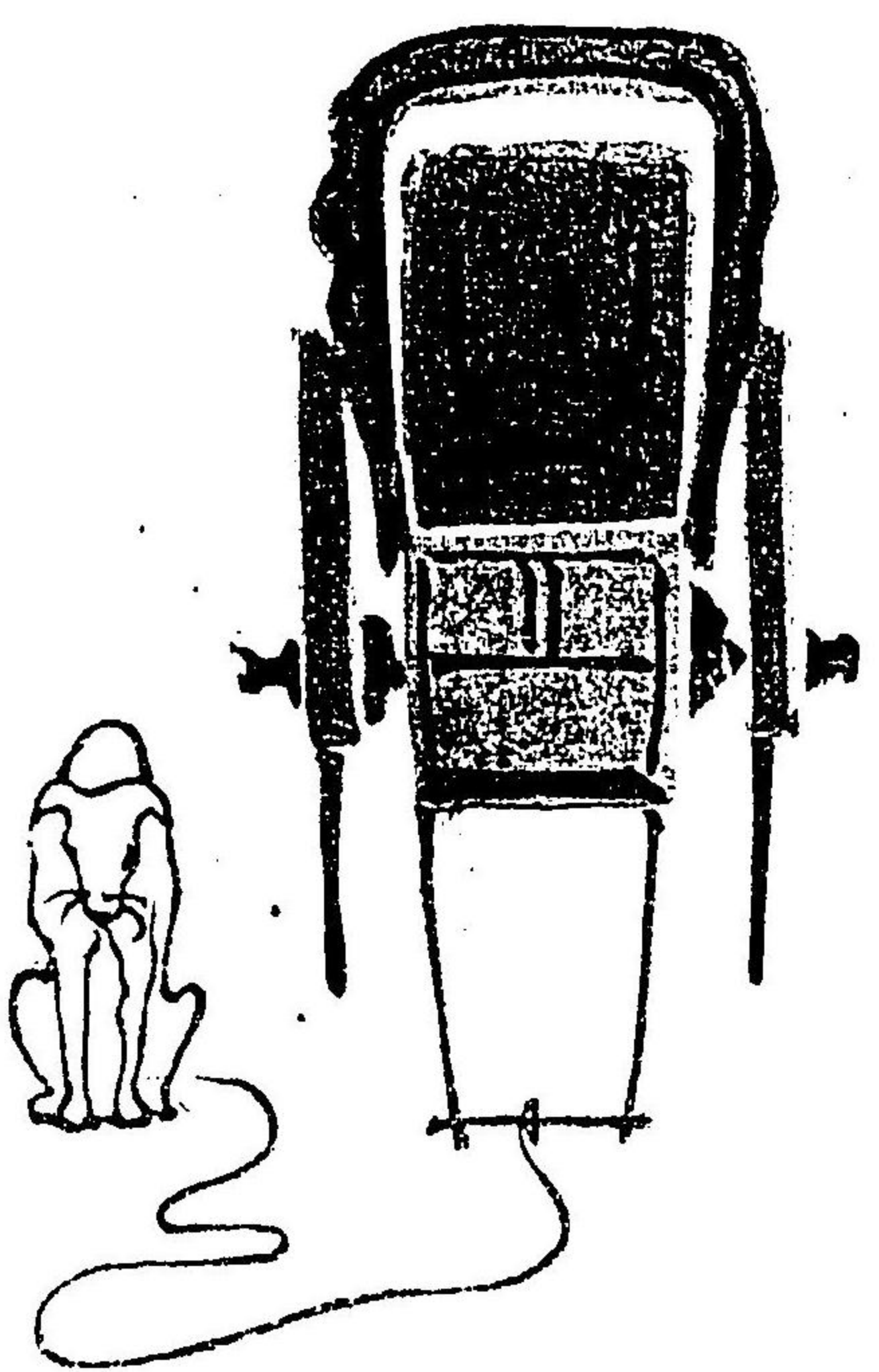
こさへつりも終へぬに、車は木津川をわたりて、早くも奈良に着きぬ。聲鋭く賣り来る辨當を購ひて、關西鐵道に乗移る。車室の廣く萬づ整へるここ、奈良鐵道に比ぶべくもあらず。居士兩鐵道の得失を論ずるに、減りたる腹に、公け腹さへ立てらるかじ。

大佛を右手に見、加茂の驛をこゆれば、やがて笠置あり。松の下露と詔ひけむ古の事なご、そゞろに悲しく、行宮の跡遙に伏し拜む。車は川に添ひて走

りに走れば、時の間に、大河原、島ヶ原など打越えて、伊賀の國上野に着しは、二時下る頃にやありけむ。

降りて先づ目に入りしは、こゝに立てられたる上野近傍名所案内のペンキ塗の大畫額なり。上野舊城、芭蕉塚、伊賀越仇打、月瀬など、それゝゝに限ざりゑがける。三人あきれて、目も口もあきて見る。居士、この汽車は汽船に似かの梅溪は貝細工に似たりおご評しつゝ、これも道人の末流とおもへば、あさましこいへば道人頭かきてさてもゝゝと嗤ふ。

こゝより月が瀬まで人力車を雇ひぬ。道凡そ三里二十丁、犬ありておのお



の綱曳す。折しも、空打しぐれて霰さへ交れば、母衣かけて走らするに、いぶせさ限あし。上野の町を除きては、大方山蔭又は野徑なり。寒さ甚しく足も凍じ、體内の血も氷らむとす。

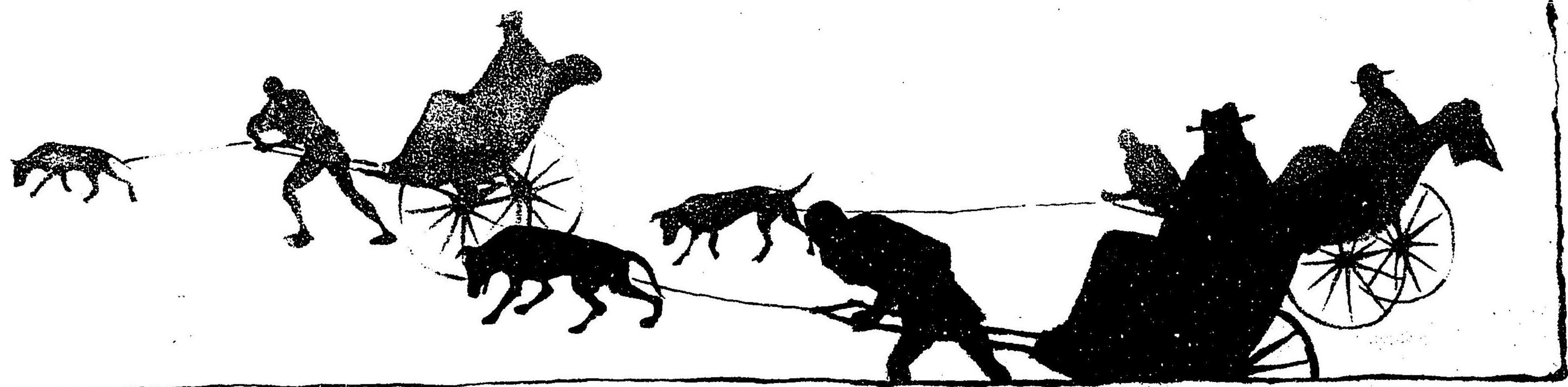
仇守る 韓野のさむさ いかならむ

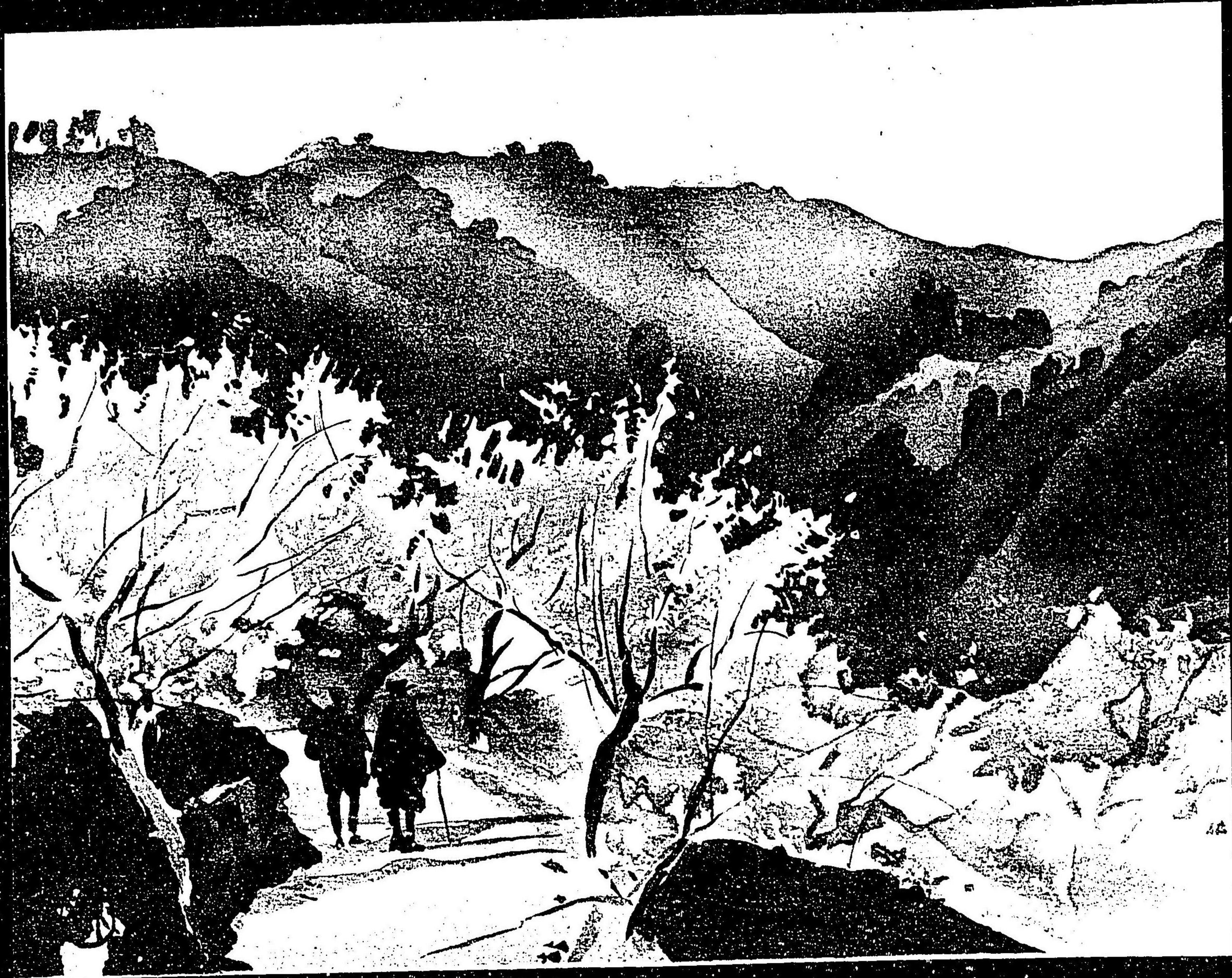
あられふさまく 山蔭の道

彼をおもへば物の數にもあらずと、みづから勇氣を鼓舞するも、この年の賜ものあり。

石打といふ處にて休みぬ。月が瀬村の入口なり。こゝより梅溪まで二十丁といふ。是より先、居士を曳ける、犬恨むることやありけむ。綱をぬけて遁げたり。車夫、かの犬は五圓にて買ひたるものを、獨引かへし、血眼になりて探しにゆく。やがて、いご力なげに還り來て、往方知れずごうめくもいごほし。そも、犬は主人を戀ひ慕ふものなるを、かく遁去りたるは、彼が兼ての逆待のほご、思ひやらる。夫につけても、我が國人の動物をもてあすごご、あまりに酷に過る事あご、西洋にくらべて言ひしろふ。道人、この家にて、我くにごて捧げ出したる菓子を探りて、各の犬に與ふ。少婢いご惜しげに打守る。あはれ、彼女は、この上もなき品ごおもへるものを、おのれらのしわざの大名めくを、くちをしく憤れるにや。跡にて聞けば、この菓子は一つ各五厘といふ。道人が長き指にてつかみごりて、二三十投げ與へたれば、さも思ひけむかし。

これより、伊賀の國境までは、爪先上りあるを、大和國に入りては下り道あり。吹風の香、たゞならぬは、はやくも梅溪の近づきし事知らる。月が瀬村役場の前を過ぎ、水車の音、さやかある山口を入れば、身は蕪世界の人ごなりぬ。懸崖數百仞、その下に青う流るゝは、躑躅川にして、見上る數百丈の峰より谷ふかく、白雲の伏せるが





ごときは、名におふ梅あり。蒸は空に満ちて、春風に花の舞ひ遊ぶを、この世の心ちせず。鶯谷といふは、咲つゞく花、ここにめでたく、その鳥の聲も、たゞせねば、名づけしごぞ。こゝには小亭あまた構へて、茶菓すゝむる少女が友も少からず。

居士は、犬を失はれて、いさおくれければ、おのれ等この處にて待つごとき數時。眞福寺、三學院などは、いつごぞご少女に問へば、それらは總て舊道なり、そのかみは、この山上に、人道つけられたれば、さる名處は、いづれも尋ねよる處ありご承はりしが、今は新道成りて、行く人極めて稀なり、この谷の上なるが、大觀坂なりご教ふ。

居士、至りつけば、打つれて躑躅川に架せる月が瀬橋をわたる。こゝは昔は竹陰の渡といひしも、今は橋成りて、その名空しく存するのみ。それより山蔭にそひ、雙岐川をわたり、川を右にしてくだりゆけば、桃香野あり。梅花道をおほひて、花のトンチルの稱あるは、この頃の命名にや。時に日やうゝゝくれむごす。宿はいづくにせむなごいふに。

月が瀬は 梅さきみてり うぐひすの

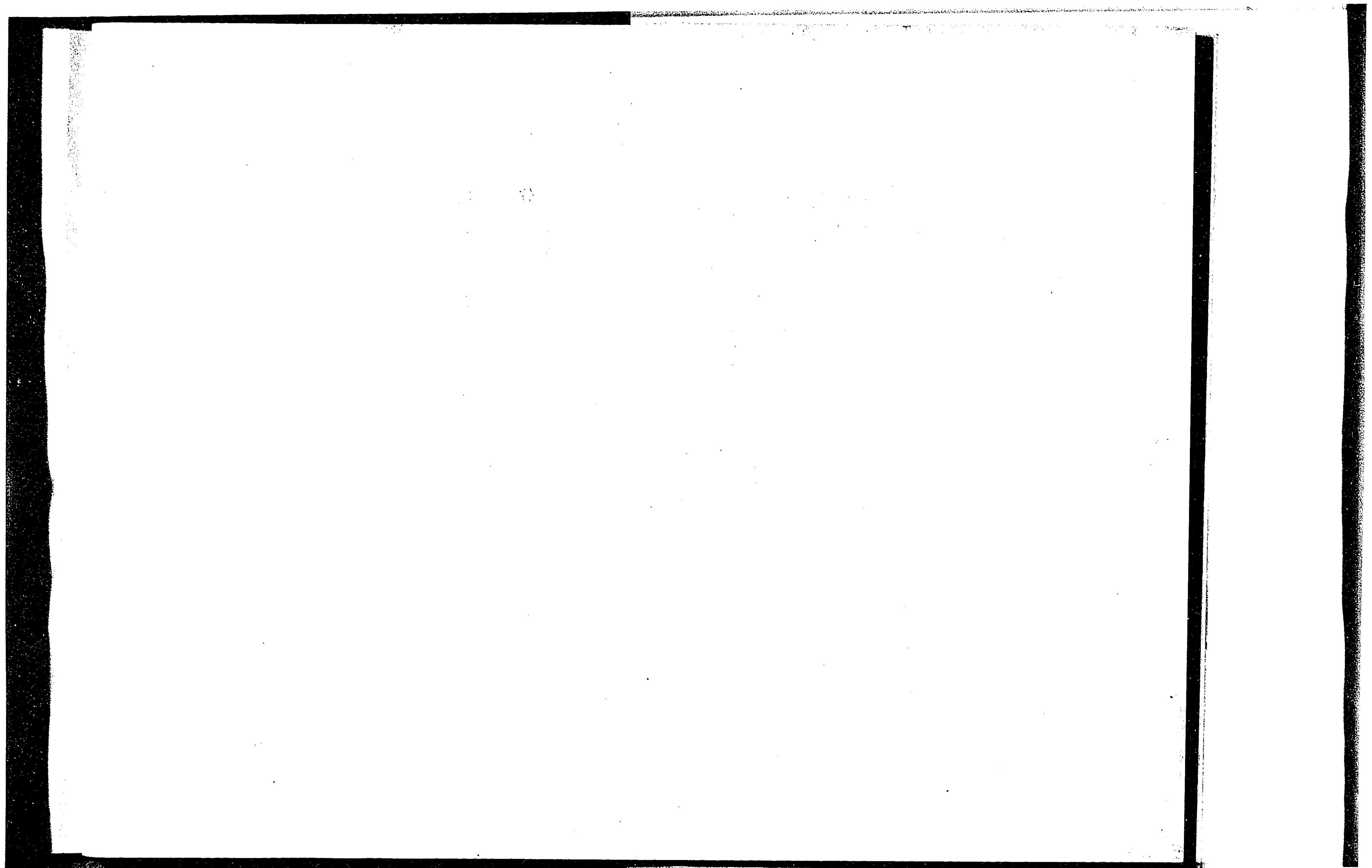
やごらむ方に 宿はもごめむ

やがて、雪中庵といふに入りぬ。

この家は川に添ひて、老梅枝を交へたる間に、あれば雪中庵の名げに空しからず。二階ある一室を我が物とし、障子開けば、見わたすかぎり梅林にして、夕日の餘光の遠山に黄ばみあひたるなど、いかで、たゞに見てのみあるべき。道人即ち大カバン押開き、彼の光線の消ぬまにきて、畫紙ごりいだし、ごくごく書き成せば、居士は、こゝぞご寫眞機取立て、早くもこのけしきを寫しごりぬ。

三人は、汽車中の辨當腹あるが上に、かくしも道を歩きたれば、やうゝゝ胃腑の空虚を感じ、手を拍ちて、飯をご乞へば、少婢の顔赤きが出て来て、かごこまりました。ごいひひて退く、時に六時三十分。さて待つごこ數十分を経れごも持て來ず。七時に至りて、又催促しければ、同じくかごこまりました。





いひて退く。又三十分を経て手うちたゞき、入り来る少婢を待むかへて、何故にかくおそき一體何物が出来るご聞けば、牛肉ご鶏ごがありますごいふ。鶏は結構、すぐに持てご命じぬれば、かしこまりましたごいひて退きぬ。さて二十分を過ぎぬれども来らず。三人今はすき腹さへ立ちつれば、更に少婢を呼びて質すに、彼女は平氣ある顔して、鶏は少こしく隙ざりますごいふ。今にありて何事ぞ、牛はごいへば、それは今日買ひました新らしき肉がありますごいふ。さらば、それにせむごいへば、又、かしこまりましたごいそぎゆき、やがて入り来て、おあつらへの品は、御膳の菜ご別の御積りかご問ふ。さやう、たゞ早くせよごいふ。さても猶来らず。手をうつご頻りにかさあり、九時ちかうされる頃、小鍋の口径五寸ばかりあるご、牛肉ご水菜、東京にていふ京菜、ごを運び來ぬ。いきごほろしけれご、小言いはゞいよ、腹へりぬべければ、ごへご引よせて、一つある火鉢に、三人額をあつめて煮るに、火少くして急に煮ゆす。又手うちて炭を乞ひ、辛うじて口に入る、まてになりしは、九時を過る頃ありき。肉素より堅く、水菜をさへ加へたるが、いかゞはしけれごも、空腹のありがたさにうま、ご打食ひ、主人の智には及ぶべからずご、の、じりあふ。やがて持出す膳は、小笠原式の運びなれごも、飯は冷ぬ、菜は氷りて喉に下らず。これも、戦時の雛形にやご、不平ながら呑みこめば、少婢、重くるしき詞にて、御湯に入りなはれご云ふ。その湯はいかに、その作りさまはご聞けば、はい向ひの家にて、姫が湧かしますごいふ。居士、おのれは用なしごいへば、道人も同じくごらじごいふ。おのれ、

姫が湯は わびしかるべし 咲梅の

花を浴みつゝ、 いざこの夜ねむ

共に不用ありごいへば、少婢はいぶかしげに下りゆきぬ。

居士云く、早く寢床をこらせおかずば、夜半に至るごも寢られじご、少婢に之を命ずれば、こたびはおくれず直に蒲團運び來ぬ。殊勝の事よご打見れば、ごはいかに、いと薄き綿フランネルのや、垢つきたるさへあるに、枕は

頭を削らるゝばかりに堅きを與へられたる、戦時さはいへ、この煎餅蒲團は、いかに佗しからむ、虱あごもや棲む、外に善きはなきやこいへば、これで辛抱しておくれやすこいひざま下りゆきぬ。居士と道人とは、足長の男なれば、煎餅あるが上に、各足らざるこそ一尺ばかり、おのれはた、横廣の身にして、その幅足らざるこそ數尺。パツチ足袋の、その儘の丸寝、あはれ何の因果にて、かゝる憂目を見るらむと思ふも、人やりの道あらねば、いかゞはせむ。たゞをりゝゝ吹入るゝ梅の薫ぞ、この旅の宿の命あるや。

八

すきものゝ、名にや立つらむ さく梅の

かをりをしめて いぬるこの夜は

この歌、處にふさはしからず。

二十一日、寝ぐるしきに、各こく目さむれば、透間漏る曉の薫、いとなつかしく、夜の間の不平は、夢の中にきいて、愉快の聲は、朝日と共に發せられぬ。手洗ふ處の煩はしきは、宿がらにて爲むやうなし。例の小笠原式にて、すゝむる食膳に向ふ。時に七時を過ぎたり。勘定畢り茶料を與へしに、あるじ出て来て、恭しく額づく。多分に頂きまして、こいふ。その詞さへ質朴なるに、鹿の革の袴の下窄りたるを穿てるなど、いと古代なり。宿を出で川に添ひて降り、龍王橋こいふをわたる。このわたり梅多く水清くして、けしきよろしければ、居士例の寫眞す。それより笠置道をたどり、半丁ばかりゆきて、川岸に降る。水



にそひたる梅の遠白く咲つゞきたる、さながら雲のおりゐるがごとし。道人はやくもこのさま晝きはじむるに、その筆いと疾くて、山成り岩成り水流れ、見るが中に、この里の天地は、我が物となりぬ。鶴鶴の川瀬を飛びかふを見て、

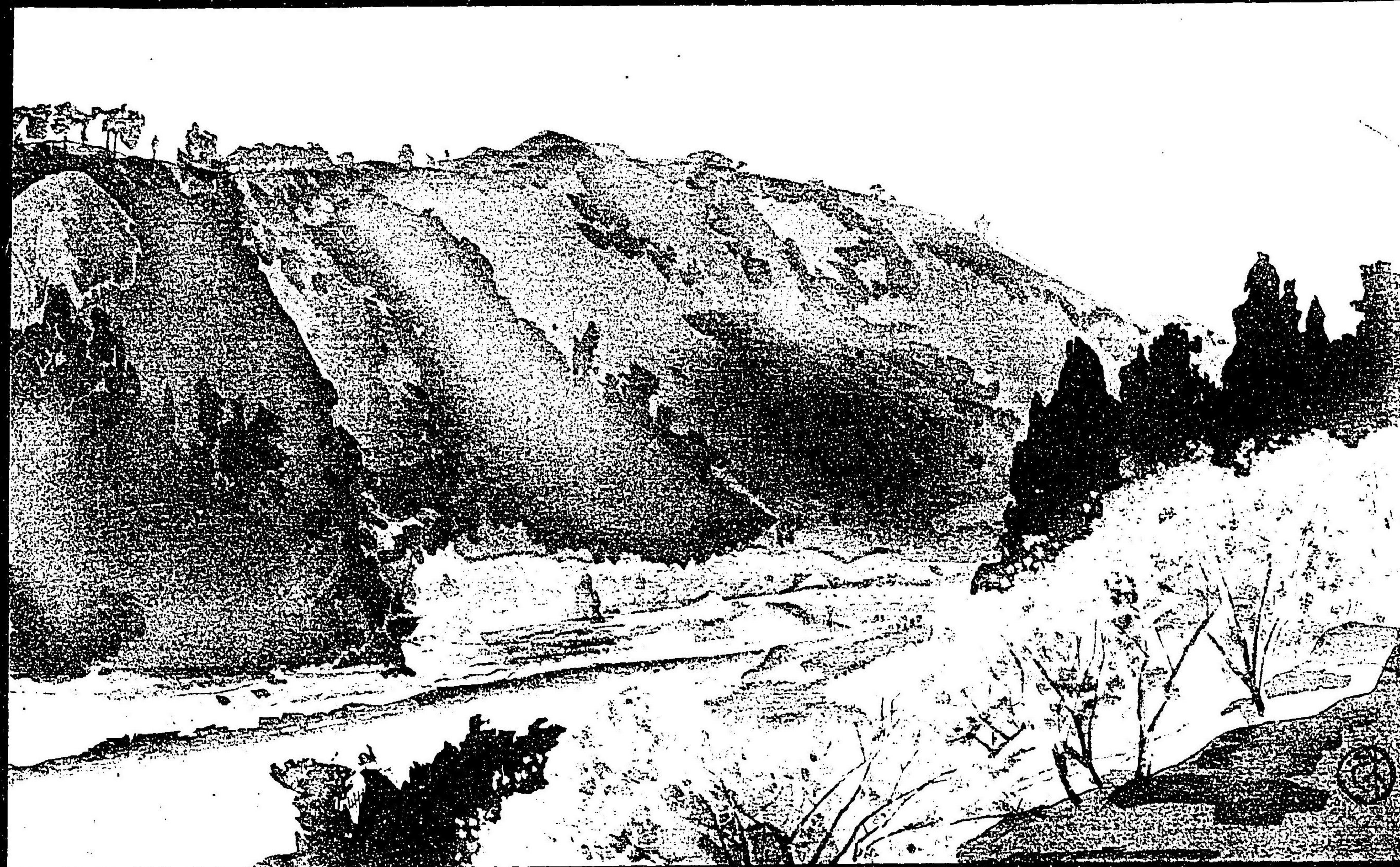
月が瀬の　せの　ごさやけき　川きしに

鶴鶴飛びて　梅の花散る

この鳥は、嫁ぎをしへ鳥庭くなぶりなどいひて、神の代に、その名を擅にし、生産の天則を授けしものこいへり。戦時人口減少の世には、缺くべからざるものよこ語り合ふにも、今の世界の、あまりに、そなたさまの事のみだれあひたるを憤りいふ。

本の道をかへり、雙岐川をわたり、一目萬本の峠に上る。道いと峻し。谷ごこの梅に、鶯の聲隙なきにぞ、辛うじて命はつながれし。上りつむれば、村あり。これ月瀬の舊村なりとぞ。土地の人は、ツキセムラこいふ。旅宿などの、やゝいかめしきも見ゆ。夜への宿よりまさりたらむとおもふもせむなし。一目萬本は、この村の打晴れたる處にあり。大天幕を張りて客を待てり。中央に





碑石あり。見れば春もや、けしきご、のふ月と梅の蕉翁の句を彫り、霞門  
謹書とあり。こゝより見おろせば、昨日分け來し谷々の梅は、巖石の、あるは  
緑に、あるは紫なる間に點綴せられ、川の水は緑青のごとくにして、その下  
を流れたり。こゝにて處の名産なる君子糖熨斗梅など購ひ、拙堂の月瀨紀  
勝のさゝやかに摺り成されたるをも求めつ。一目萬本ごしもいふは、一目  
千本の上に出でむごの名にて、雅びたるにはあらねど、げにその稱に負か  
ず。こゝより、聊くだりゆけば、醉雲亭と標せる小亭あり。立よりて寫眞など  
買ふに、あるじ出でてきて、書畫帖持ち出し、何か紀念に書きたまはずやこい  
ふ。見れば名士の筆蹟も少からず。よし、書くべし、墨すれとて、道人まづ  
筆とりて處のけしきうつし出す。往來の客堵を成して見る。居士は、普通に  
ては心ゆかずとて、月夜の景をかきあらはすに、あるじいたくかしこまり  
喜び、南畫の御先生がたにやこいふもをかじ。おのれは、

戰の さちある春は 月が瀨の

梅もいよゝゝ 世にかをるらむ

これは日露戦争に因めるものぞと、みづから講釋するに、あるじますゝ、  
よろこぶ。各その雅號書きたれば、御印を願ひたしこいふ。我等は素人なり、  
いかでさる事々しきものあらむと立出でつるに、あるじ額に手をあて、  
あまたたび禮云ひ、尉斗梅數包を志あればとてさし出す。それは入らずと  
いひ、來るに、あるじ追つかけて、是非にこいふ。その志殊勝なればうけ  
とりて下る。さるにても、道人、居士などの筆、南畫と見たるは面白きことよ。  
他日何人か見あらはしつるなど笑ひ合ふ。

例の月瀨橋をわたり、鶯谷に來るに、俄に空かきくもりて、風荒れ雪いみじ  
くふる。いそぎて、路傍の小亭に入る。額あり浴花亭と記せり。雪はいよゝゝ、  
はげしく萬重の山より吹おろす梅と共に、家の中に舞ひ來て、さながら花  
に浴しぬるも縁あり。居士は、このけしき寫しこらむと機械取出し、障子お  
しあくれば、薰風雪を帯びて、鼻柱も折れむとす。あはれ、月雪に於るこの里  
のけしきは、既に知る人多からむ、この吹雪の中の梅花は、幾人か世に知ら



む。まして、そのさまを寫し、そのさまをゑがき、そのさまをうたはむとする、  
おのれらが、この薫世界の活動に逢ひぬることよ。花の神のしわざ心ある  
に似たり。

天にます 神のたもこも かをるまで

空にふきまく 月が瀬の梅

晴るゝを待ちて立ちいでぬるに、花は群蝶のごとくして猶空に舞へり。

月が瀬は 今はつきたり 散る梅の

かをだにおくれ 花の追風

梅溪を出て上野へいそがす。道は昨日に異あらざれば、珍しきことあした  
ゞ鍵が辻あたり、ふく風身を斬るやうにて、をりゝゝ雪あられさへまじれ

る、何を仇に、かくはふるぞ、所がらよそへおもはる。かくて停車場ちかき某の店につきしは、午後一時ばかりあり。發車は三時三十分といへば、鶏さかせて飯くひ、夜へ以來の事ども、ごりごりに語りあふ。時來て停車場に至れども、烟の影だに見えず。雪の脚は早く、車の足はおそし。定れる時よりおくるゝここ、大約一時間にして、辛うじて來れるに乗込めば、人多くして坐せられず。強ひても、のせむには、互に膝は容れらるべきも、例の我が物がほに、腕張り足伸して坐せるものゝ少からぬが、悪ければ、譲りくれよともいはず。戰の功は、天が下に隠れなき國ながら、公共の徳義、いかでかうはご、薰世界を離るれば、やがてまた、陋世界ごなれるぞいご腹だゝしき。

奈良につきて待つここ一時間、夕日の生駒山に入るを見はてゝ、車に乗る。いぶせき室に、火かけさへくらく、月の光も見えず。例の宇治茶をのませられ、七條にかへりつきしは、八時を過る頃なり。車を三條小橋の傍なる五木庵に走らせ、疲れをやすめ、天麩羅に口をすべらかして、きのふ以來の壯遊を語り合ひてわかれぬ。

實にや、櫻の艶こそあらね、梅の雅にその香の清きは、また捨つべきにあらず。まして、この月が瀬は、山のたゞずまる、水の流れさへ、打そひたる、世に似るものもなかるべし。佳人のなまめきたる粧を、吉野の花に譬ふるを得べくば、この花は、高士の清臥せる趣ありとやいはまし。是は風雪を凌ぎて、その操いよゝゝしるく、彼は世ご共に推し移りて、その美ますゝ添ふ。いかで、その一を採りて、その一を捨てむや。

そもゝ、梅は天然に、我が國に生ぜるもあれども、その多くは漢土より移し來れりと聞く。げにや、この花の文士に深く愛せられたるは、彼の帥の大伴卿の時などをや、初めごせむ。その後は、菅公のいたく愛せられたるは、人の普く知る處にして、鶯宿梅のやさしき詞は、たその名たかくかをれり。かく早くより、もてはやされしものながら、大方は、一樹一枝の雅を賞するにござまりて、このごこく、雲ご見まがふばかりの眺めは、きこねず。そはごまれかくまれ、この梅は、今は吉野の櫻ご相並びて、我が春の雙美ごなれるを、開闢以來曾てあらざる國光の輝く年にしも、見はやしたることのうれしければ、袖の香の失せぬまに記しおくも、御代の薰を、天が下に仰がし



16/39

めむとてなむ。

明治三十七年三月二十四日

藤園主人識

101  
31

1/6/27

明治三十八年三月五日印刷  
明治三十八年三月八日發行

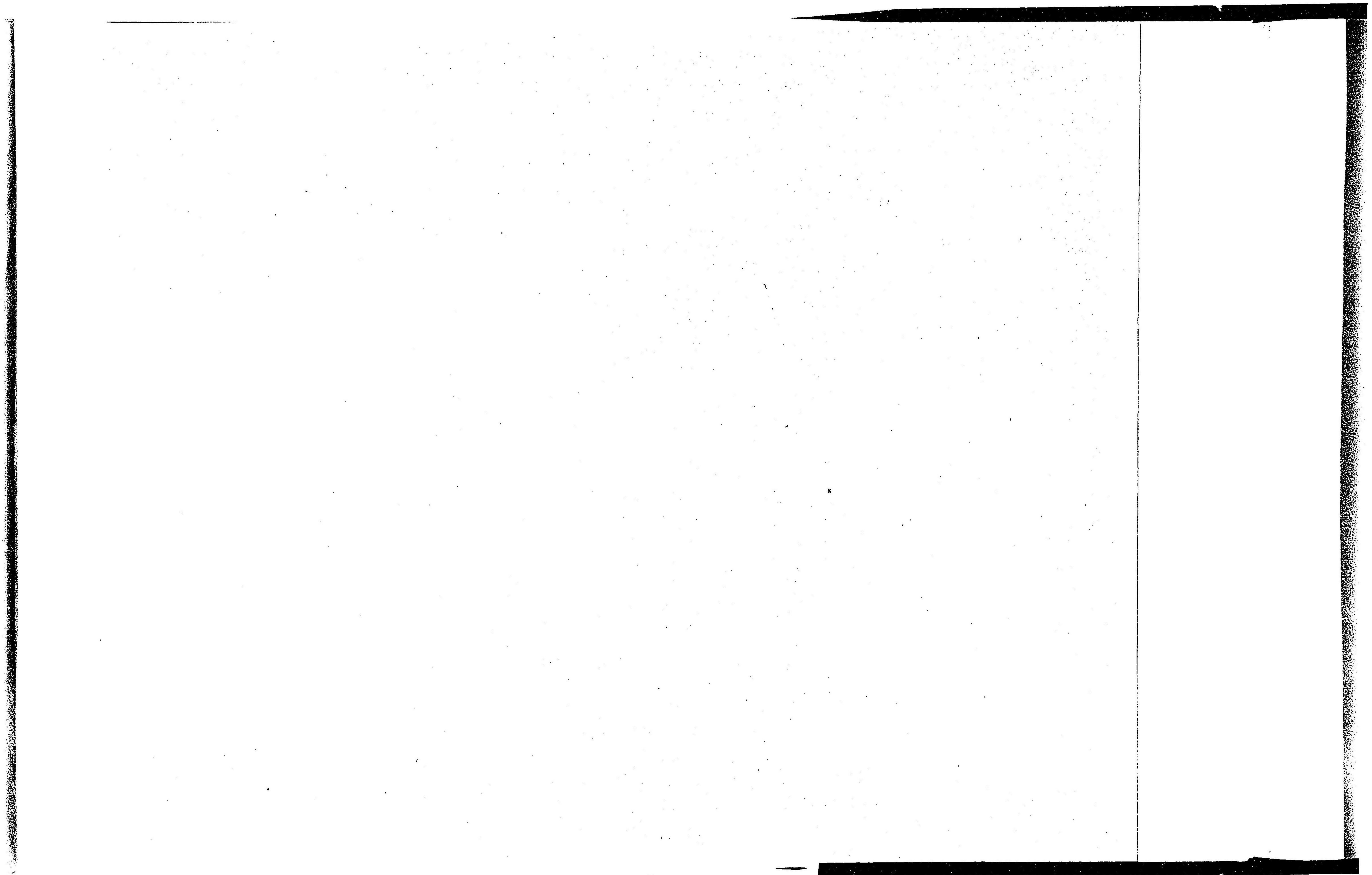
++++++  
著作權  
所有  
++++++

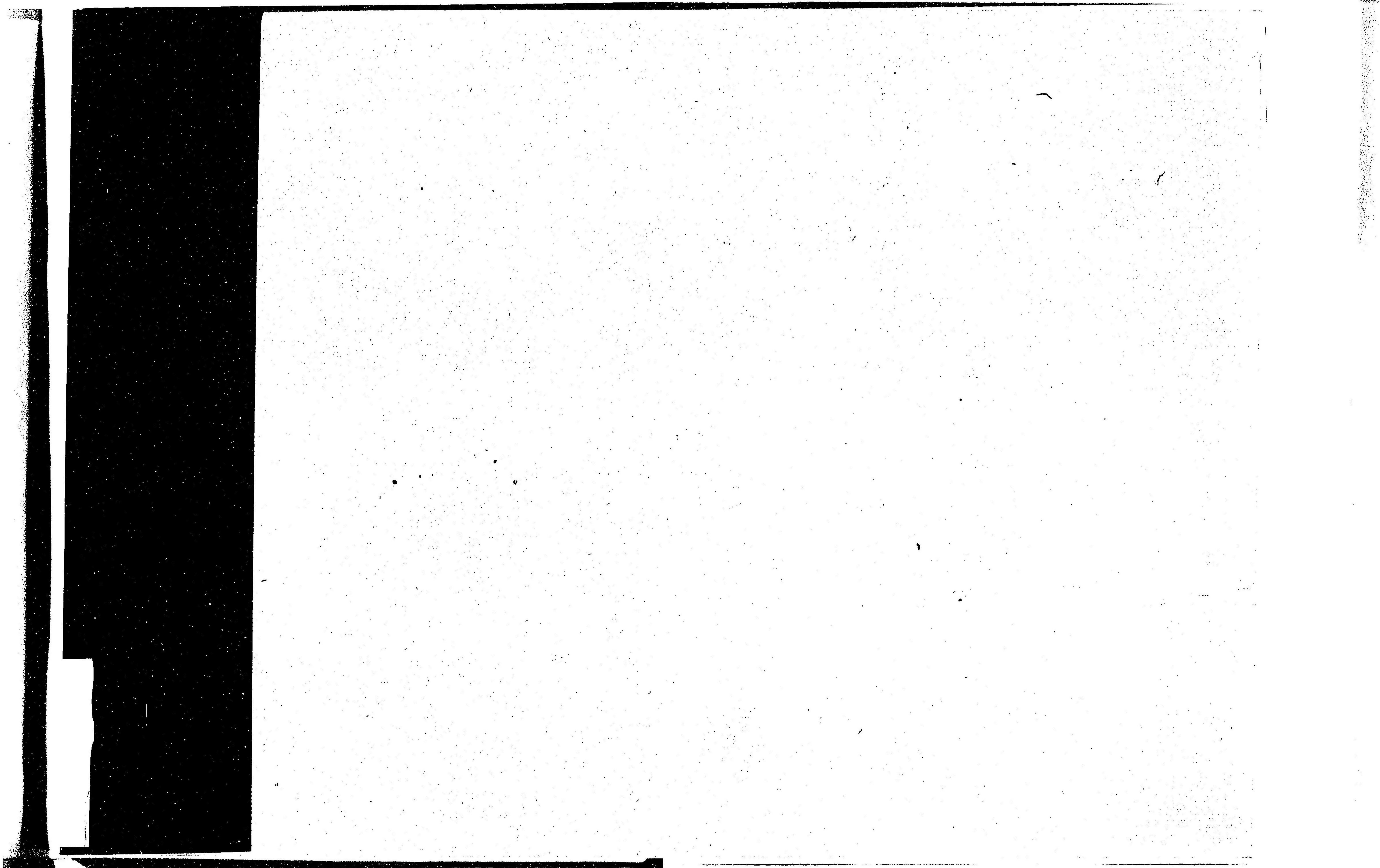
著者 池邊 藤園

發行所 京都市上京區寺町通  
二條南入十九番戶  
印刷者 山田直三郎

發賣所 京都市寺町二條美術書肆  
山田芸艸堂

IF 3D 18





205097-000-9

401-31

薰世界

池辺 義象 (藤園) / 著

M38

EDV-0100



401

31

